

大乘『大般涅槃經』における仏弟子・純陀（レジュメ）

佐藤 直実（京都大学）

釈尊入滅を題材にした『大般涅槃經』には、非大乘（初期仏教）系と大乘系の二種類がある。前者は、王舎城からクシナガラに到る釈尊最後の旅と火葬や舍利分配等の入滅後の様子を扱っているのに対し、後者は入滅前夜の弟子との問答に焦点を当てている。両經典は構成や内容を大きく異にするものの、登場人物は一致する場合が多い。それらの登場人物のうち、本発表では純陀を取り上げる。

仏弟子・純陀は、いずれの經典でも、釈尊に最後の供養を捧げる者として描かれる。そして、その純陀の供養は、釈尊成道時になされたスジャーターの供養と等価値であると主張される。しかし、その扱われ方は異なる。非大乘系『大般涅槃經』では、純陀は釈尊の入滅を早めた者として非難されるが、大乘系では最後の供養という千載一遇の機会を得た者として讃歎される。

非大乘系では、釈尊は純陀の供養を食したことでお腹を下し、それが原因で入滅が早まったと記される。そして、入滅後、純陀が大衆に非難されるのを心配した釈尊が、彼を責めないよう大衆に諭す。その際に、純陀の供養がスジャーターの供養と等しいと示し、それによって大衆からの彼への批判を防ごうとするのである。

一方、大乘系の場合は、次のような流れで2つの布施が比較される。純陀が登場するまでの間、王族から神々、魔物にいたるまで、あらゆる生き物が、最後の供養を施そうと釈尊のもとに馳せ参じるが、皆、悉く断られ、落胆した。そこに純陀が現れ、あっさりと供養を承諾されるのである。人々は驚愕しつつ、おおいに喜び、純陀を讃歎する。釈尊も、純陀の供養をスジャーターの供養と等しく尊いものであると讃歎する。

両經典ではスジャーターの供養と純陀の供養とが等価値だと述べられるが、その言説が置かれる文脈は全く異なっている。非大乘系では、スジャーターの供養は、人々の純陀への非難を避けるために示されるのに対し、大乘系では、純陀のすばらしさを強調するために用いられている。

いったいなぜ、同じ人物に対して、このような正反対の扱いが生じたのであろうか。それは、經典編纂の意図の違いに由来すると発表者は考える。非大乘系『大般涅槃經』の場合、ラージャグリハに始まる釈尊入滅前後の事実を記録することが主旨と考えられる。一方、大乘系は、釈尊の涅槃の意義を明かすことを目的としている。言い換えれば、前者は世俗（世間）の視点で記されているのに対し、後者は如来（出世間）の視点で記されていると発表者は考えるのである。

本発表では、両經典に描かれる仏弟子・純陀を比較し、彼に対し正反対の評価が課された理由について考察する。

キーワード：大般涅槃經、純陀、布施